

# 講演会 & ライブ な日々 ㉔

古川 秀明

## 帰ってきたトークライブ VOL・3

新型コロナウイルスの影響で、去年の2月29日の講演会&ライブを最後に、現在まで全ての企画が中止され、活動自粛というか、活動の息の根を止められている。

くさくさとつまらない日を過ごしているところへ、団先生の「帰ってきたトークライブ」の知らせが届く。

これを見逃すわけにはいかない。

帰ってくる前のトークライブは全ての回を録画させて頂いた。

小ぶりの段ボール箱いっぱい詰めた録画テープは、今でも我が家に保管されており、私の宝物でもある。

そのトークライブがzoomという形で帰ってきた。

団先生の講演会は会場に足を運び、生の声を聞かせてもらい、会場全体でワッと盛り上がるのが一番良いに決まっている。

しかし、「弘法は筆を選ばず」の例えがある。

きっと団先生も筆を選ばないに違いない。

今回は VOL・3。

VOL・2の感想は団先生のツイッターに書かせてもらった。

今回の VOL・3 はここで書かせて頂くことにする。

前半と後半で違う話だが、項目ごとではなく、私が心に沁みた団先生のお言葉を中心にいろいろとつぶやこうと思う。

多少ネタバレになるかも知れませんが、そのあたりは団先生、長年のよしみでどうぞお許しを（笑）

と言ってもここに書かせてもらったのは、講演のほんの触りの部分だけ。

みなさん、是非 VOL・4 に参加しましょう。

#### <団先生語録1>

「(世の中に起こる) あまりいろいろなことに振り回されたり、浮かれる必要はない。(世の中に起こる) ほとんどのことは人の世界で起こり得る。(様々な問題を) 2~3年置いておいても、私は困らなかった」

#### <私のつぶやき>

確かにそうだよなあ。新型コロナウイルスにしても、人類初体験ではない。

今までの人類史のなかで、ペストもコレラも天然痘もあった。

問題を2~3年置いても、別に困らないというのは大切な感覚だ。

私なんぞは、ちょっとしたことで右往左往してしまうけど、あとで冷静に考えたら、自分のおっちょこちょい加減に笑ってしまう。

オイルショックの時はトイレットペーパーを買うのに並び、2000年問題の時はペットボトルのお水を買いだめし、コロナでマスクが品薄になった時は、マスクの代わりにパンツでもかぶろうかと真剣に思い悩んだりもした。

しかし、女性用のパンティをかぶって電車に乗ったら確実に変質者だし、自分のパンツをかぶる勇気はないし、パンストをかぶったら銀行強盗に間違われる。

この言葉で、おっちょこちょいな自分に落ち着きを取り戻させてもらえた。

### <団先生語録 2>

「(流行や要望に)流されず、私がおもしろいと思うことを話すことにしている。流行は社会や時代の使い捨てにされる。有名になることを一番の価値にしたら本当の自分の価値が消える。ブームが消えて、あの人は今になってはいけない」

### <私のつぐやき>

自分がおもしろいと思うことを話すことが、結局は聞き手も楽しめることになる。

経験的に私もそう思う。

しかし、とても小心者の私は、今回はこのテーマの話題を要望されているのだから、それに沿った話をしないと、次の仕事がもらえないかも・・・という臆病風に吹かれて、ついつい風見鶏のように、風に吹かれるままの方向で話をしてしまう。

結果的につまらない話になると、結局次の仕事がもらえないから、いったい何をしているのやら分からなくなる。

流行り物はすたり物というが、その通りかも知れない。

昨日は不登校、今日はいじめ、明日は児童虐待・・・。

マスコミで騒がれる事柄を追従するかのようになり、その時々の特ピックスに迎合したテーマを要求される。

また、有名になることを目的にすると、これも確かにろくなことはない。

チューインガムみたいに、味のあるうちはチャホヤされるが、時が流れ、味が無くなると容赦なくゴミ箱に捨てられる。

細く長く続いているものに力があると、団先生がしょっちゅう仰っていたが、団先生のお仕事は全てそうなのだ。(決して細いとは思わないが・・・)

### <団先生語録 3>

「誰かに好かれたがるのは危ない。誰かが自分にチャホヤしてくれないから、自分に価値がないと思うのは危ない。よくできる子だけが(親に)褒められるのと同じ」

「お前は何もできなくてもそのお前全部が好きなんだ・・・子供はそんな想像が

できないから、それを思わせてやるのが親の仕事」

「～ができるからお前は素晴らしいではない。自分の能力が高いから、自分は素晴らしいと思うのも良くない。そのままの自分を好きになることが大切」

#### <私のつぶやき>

う～ん、確かにみんなにチャホヤされたら、気分は良い。

けど、覚せい剤みたいにもっと欲しくなるし、それがないと苦しくなる離脱反応も起きる。

子どもは自分よりよくできるきょうだいや、同級生などと比べられるとひどく傷つく。

自分が子供の頃、そんな悲しい思いをしたことを忘れて、自分もまた同じ過ちをしてしまう。

あるがままの自分、あるがままの子供を愛することができたら、どんなに素晴らしいだろう。

そんな単純なことを、複雑に考えて、こんがらがってしまう自分がある。

#### <団先生語録 4>

「好きで始めた事をなかなかやめないことこそ、才能だ」

#### <私のつぶやき>

これだけは、私は今も実践中だ。

ギター抱えて歌い始めて、もう46年。

売れもせず、褒められもせず、懲りもせず、めげもせず、タダタラント続けている。

なるほど、これは執着ではなくて、才能だったのだ。

なんだか救われた（笑）

### <団先生語録 5>

「何事にもゴールしない。今も鋭意努力中！」

### <私のつぶやき>

この言葉さえあれば、人生に挫折はないな。

しかもひたすら上昇志向。

いつも心に銘じておきたい言葉だ。

ゴールなど設定しなければ、いくらでも「時間」と「ところ」に余裕ができる。

### <団先生語録 6>

「誰もが自分の晩年をしらない。今日を晩年と思って、自分のやれることをやる。若い人でもいつ死ぬか分からない（もし18歳で死んだ人がいたとしたら、その人の晩年は17～18歳ということになる）」

「その人がいくつで死んでも、（その人が死ぬ前の）あの時がその人の晩年。（そう思うと）今、自分に何ができるか、もし明日人生が終わったとしても悔いのない今日を送る。（晩年学）」

### <私のつぶやき>

確かに人間、いつ臨終の時を迎えるかわからない。

だけど、何となく自分は、平均寿命くらいは生きるのではないか……。あるいは、今はまだ死なないだろう……。なんて高をくくっている。

そうなると、一日一日をダラダラと無意味に食いつぶしてしまう。

それも自分の人生と割り切ってしまうえばそれまでだが、充実感からは遠ざかるだろう。

晩年を考えるとすることは、自分の命を考えるとということかもしれない。

命というものは、いつも晩年を考えることを要求しており、常にそのメッセージを送り続けているのかも知れない。

そのことを考える視点が、今の日本、特に若者たちには不可欠のように思える。

先進国の中でトップレベルの自殺率を示すこの国で、効果がなかなか現れない  
小手先だけの自殺対策を考えるより、命の在り方を根底から見つめ直す晩年学  
の考え方は、示唆的だ。

#### <最後に・わたしのつぶやき>

2月25日、政府は自民党国防部会・安全保障調査会の合同会議で、外国の船舶  
が沖縄県・尖閣諸島への上陸を強行すれば、凶悪犯罪と認定して相手の抵抗を抑  
える「危害射撃」が可能になる場合があると説明した。不法上陸は中国海警局な  
どを念頭に置いた。

遠い遠い雷であればよいのだが・・・。

教訓 I

作詞：上野 瞭  
作曲：加川 良

命はひとつ 人生は1回  
だから 命を捨てないようにネ  
あわてると つい フラフラと  
御国のためなのと 言われるとネ

青くなって 尻込みなさい  
逃げなさい 隠れなさい

御国は俺達 死んだとて  
ずっと後まで残りますよネ  
失礼しましたで終わるだけ  
命のスペアはありませんよ

青くなって 尻込みなさい  
逃げなさい 隠れなさい  
命を捨てて男になれと  
言われた時には 震えましょうよネ  
そうよ 私じゃ 女で結構  
女のくさったので かまいませんよ

青くなって 尻込みなさい  
逃げなさい 隠れなさい

死んで神様と 言われるよりも  
生きててバカだと 言われましょうよネ  
きれいごと 並べられた時も  
この命を捨てないようにネ

青くなって 尻込みなさい  
逃げなさい 隠れなさい

シンガーソングライター

ふるかわひであき